ふるさと安曇野
きのう きょう あした

No.26　2022.7.23

安曇野市平和都市宣言10周年記念

安 曇 野 の 戦 争

→→→→　郷土から戦場へ　→→→→

令和４年７月23日～ ９月19日

安曇野市は、平和の意味と尊さを見直すとともに、市民が平和で安全な環境のもと、幸せな生活を営むことを目的に、平成24年12月29日に「安曇野市平和都市宣言」を制定した。今年の12月で、10周年を迎える。

先の大戦で、家族と普通の暮らしをしていた多くの人々が戦場へ向かい、命を落とした。ここでは、安曇野の人々が、どのように戦場へ向かい、そして、いつ、どこで命を落としたのか。さらに郷里はかれらの死をどう扱ったのか。その一端を紹介したい。

兵士になり、軍隊へ

19世紀中頃以降、国家は自らの存亡をかけて戦争をする時代となる。明治政府も、明治６年（1873）に「徴兵令」を公布し、国民を兵士とする近代的軍隊を組織し、戦争に備えることになる。当初は兵役免除規定があったが、法律の改正により国民皆兵に近づいた。

写真１　昭和７年の徴兵検査の記念写真（当館蔵）　会場は長野県穀物検査所豊科出張所　松本連隊区徴兵署の看板が掛かる

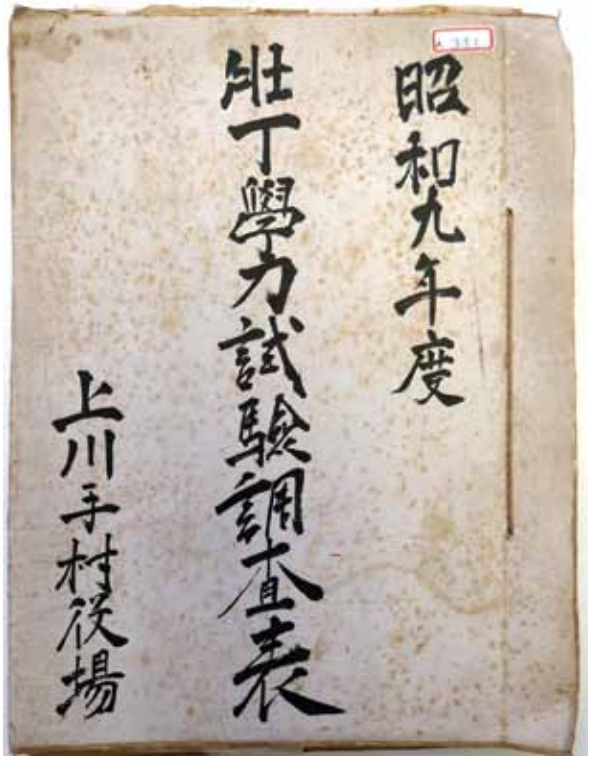

写真２　昭和９年度 壮丁学力試験調査表 上川手村役場（当館蔵）
壮丁は徴兵検査を受ける義務のある満20歳の男子
徴兵検査にあわせて学力の検査が行われた

検査年月日		4年6月	5年	6年7月	7年7月	8年9月	9年5月	10年	11年6月
検査人数		47		49	37	39	45		44
合格	甲	6		11	13		13		11
	一乙	11		5	3		4		5
	二乙	13		13	2		8		13
不合格	丙			14	9		15		12
	丁						3		5
	兵役免除	17		3	3				
延期者				3			1		
入営兵		5		7	9	5	9		13
志願兵				4		6	4		
合格入営				2		1	1		
不合格	陸軍	11		13	22	17	9		
	海軍	2		3	5	6	7		

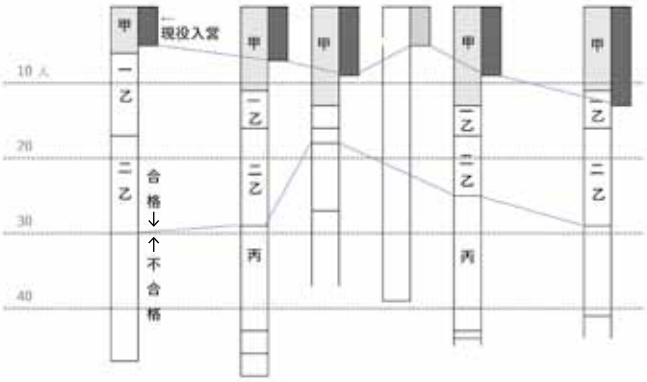

表１　東川手村の徴兵検査

男性は、20才に達すると徴兵検査を受ける。戸籍のある町村役場から日時、場所の通知があり、学力検査や身体検査を受けた。兵士を集める徴兵事務は、市町村の兵事係が関わった。敗戦時の兵事関係書類の焼却処理命令により処分され、徴兵の具体的な流れはわからない。ただ、『明科町史　下巻』に、一部欠けるが旧東川手村の昭和４年から11年までの徴兵検査関係の表が掲載されており、徴兵検査から入隊までの一部がわかる。済南事変（昭和３年）、柳条湖事件（昭和６年）、満州事変がおこり、満洲国が独立（昭和７年）、盧溝橋事件（昭和12年）から日中戦争が勃発する時期である。

昭和６年をみてみたい。検査人員は49名。そのうち延期者が３名、大学等に在学する者は徴兵検査が延期される。ほかに志願兵が４名いる。46名が検査を受け、身長1.55*m*以上で身体強健で現役兵に適した29名が合格、その内訳は優秀な甲種11名、続く乙種はさらに分けられ第一乙種５名、第二乙種13名であった。不合格は17名、内訳は身長が足りない体が弱いものが国民兵に適する丙種14名、疾病等のある者は丁種、兵役免除者が３名であった。東川手村に割り当てられて、翌年軍隊に入る現役兵の数は７名であった。甲種合格が11名いるので、その中から７名が選ばれた。選抜方法は抽籤（ちゅうせん）、すなわち籤（くじ）引きであった。日中戦争が始まる直前の昭和11年の現役兵の割り当ては13名あり、11名の甲種合格では足りず、第一乙種から２名が抽籤で選ばれた。

現役兵は翌年１月に入営するが、東川手村からは全国の部隊に入営した。６年間をみると、陸軍は、「郷土部隊」の歩兵第50連隊（松本）が最も多く12名、２割程度である。歩兵第50連隊が属する第14師団の輜重兵、工兵、騎兵などの群馬・栃木・茨城県の部隊が続く。徴兵区を持たない近衛師団、朝鮮・台湾に常駐する部隊、関東軍をはじめ中国大陸の部隊にも入営している。海軍は９名とわずかであり、横須賀鎮守府の横須賀海兵団に入営し新兵教育を受けた。

現役以外の合格者は、第一補充兵役、第二補充兵役に振り分けられる。そのほかは第二国民兵役になる。その期間は40才まで続く。第一補充兵役は教育召集により、定期的に数日間、軍隊に召集され訓練を受け、戦争時の戦病死者の補充にあてられた。この頃の第二補充兵役は合格といっても教育召集もなかった。現役で軍隊に入る以外は、在郷軍人名簿に記載され管理され、戦時・事変に際しては、必要に応じて召集さ

	所属部隊※	入営地	『町史記載』入営部隊　昭和	4年	6年	7年	8年	9年	11年	合計		
第１４師団	歩兵第５０連隊	松本	松本歩兵歩兵第５０連隊	2	3	2	2		3	12	19	第１４師団
	輜重兵第１４連隊	水戸	水戸輜重１４連隊	1	1	2			1	5		
	騎兵第１８連隊	宇都宮	宇都宮騎兵１８連隊						1	1		
	工兵第１４連隊	宇都宮	宇都宮工兵１４連隊						1	1		
近衛師団	近衛歩兵第１連隊	東京	近衛歩兵第１連隊					1		1	3	近衛師団
	近衛野砲兵連隊	東京	近衛野砲連隊					1		1		
	近衛輜重兵連隊	東京	近衛輜重連隊						1	1		
第３師団	野砲兵第３連隊	名古屋	名古屋野砲３連隊				2			2	3	第３師団
	歩兵第６連隊	名古屋	名古屋歩兵６連隊					1		1		
第７師団	歩兵第２７連隊	旭川	旭川歩兵２７連隊					1		1	1	第７師団
第１騎兵旅団	騎兵第１４連隊	習志野	関東騎兵１４連隊				1	1		2	3	第１騎兵旅団
	騎兵第１４連隊	ハイラル	ハイラル騎兵第１４連隊						1	1		
	鉄道第１連隊	千葉	千葉鉄道連隊	1	1					2	2	
	電信第１連隊	東京・中野	中野電信１連隊			1				1	1	
台湾守備隊	台湾歩兵第２連隊	台南	台湾歩兵２連隊		1					1	1	台湾守備隊
第１９師団	歩兵第７５連隊	朝鮮会寧	朝鮮会寧歩兵第７５連隊		1				1	2	4	第１９師団
	騎兵第２７連隊	朝鮮羅南	朝鮮羅南騎兵第２７連隊			2				2		
関東軍	独立歩兵第３大隊	安東	南満安東独立守備隊		2	1				3	6	関東軍
	関東軍飛行隊	平壌	関東軍飛行連隊					1		1		
	独立歩兵第１０大隊	新京	新京独立歩兵第１０大隊						1	1		
	独立歩兵第５２大隊	半載河	半載河歩兵５２大隊						1	1		
海軍	横須賀海兵団	横須賀	横須賀海兵団			1	1	4	1	7	7	

表２　東川手村の現役兵の入営部隊　　※は正式部隊名

れた。日中戦争で中国大陸の戦線が拡大すると、２年の兵役期間を終えた予備役や、後備役にあった元兵士の国民も召集令状（赤紙）によって召集された。松本でも昭和12年に歩兵第150連隊が編成され、大陸戦線に向かい、多くの犠牲者を出した。40才まで兵役の義務が続いた。

昭和16年に太平洋戦争に突入すると、さらに戦線が拡大し、アジア全域に軍隊が展開する。昭和18年にアメリカ軍の反攻が本格化すると、戦死者も増え軍隊の人員不足は深刻化する。同年10月、文科系の大学生や専門学校の学生の徴兵猶予はなくなり、19年10月に徴兵年齢が19才に下げられた。昭和20年になると、本土決戦に備え「根こそぎ動員」で多数の兵士が集められた。『戦没者遺影集』（堀金村）の軍歴をみると、昭和11年の徴兵検査によって第二国民兵に編入され村民は、教育訓練も受けないまま暮らしていたが、昭和19年に召集されて兵士となり、翌年ミンダナオ島で戦死している。

戦地で失われた安曇野の命

厚生労働省によれば、先の大戦の戦没者数、兵士や民間の犠牲者があわせ約310万人にのぼり、そのうち海外で240万人が亡くなっている。

安曇野市域から兵士や軍の命令に基づいて動員された戦病死者数は、『南安曇郡誌　第三巻上』と『明科町史　下巻』の記載をあわせると、明治時代以来1,836名に及ぶ。この中には、戦場で亡くなった兵士のほか、現地で病気やケガを悪化させたり、内地に戻って陸軍病院や自宅でなくなった者も含まれる。

1,836名のうち、昭和12年（1937）の日中戦争以降が1,681名を数え、アメリカ軍の反撃が始まった昭和19・20年（1944・1945）の二年間だけで1,200名を越える。

日中戦争以降の戦病死した場所は、明科町が『明科町史　下巻』、三郷村が『三郷村誌　第一巻』、掘金村が『戦没者遺影集』に、軍から通知を受けた852名の戦死地が記載されている。内地は、戦場から戻って各地の陸・海軍病院や自宅での死亡である。最も多いのはフィリピン180名と、90名が亡くなった

※ここまで集計等には次を参考にした

●南安曇郡誌改定編纂会　1969
『南安曇郡誌　第三巻上』

●明科町史編纂会　1980
『明科町史　下巻』

●三郷村誌編纂会 1980
『三郷村誌　Ⅰ』

●堀金村遺族会　1985
『戦没者遺影集』

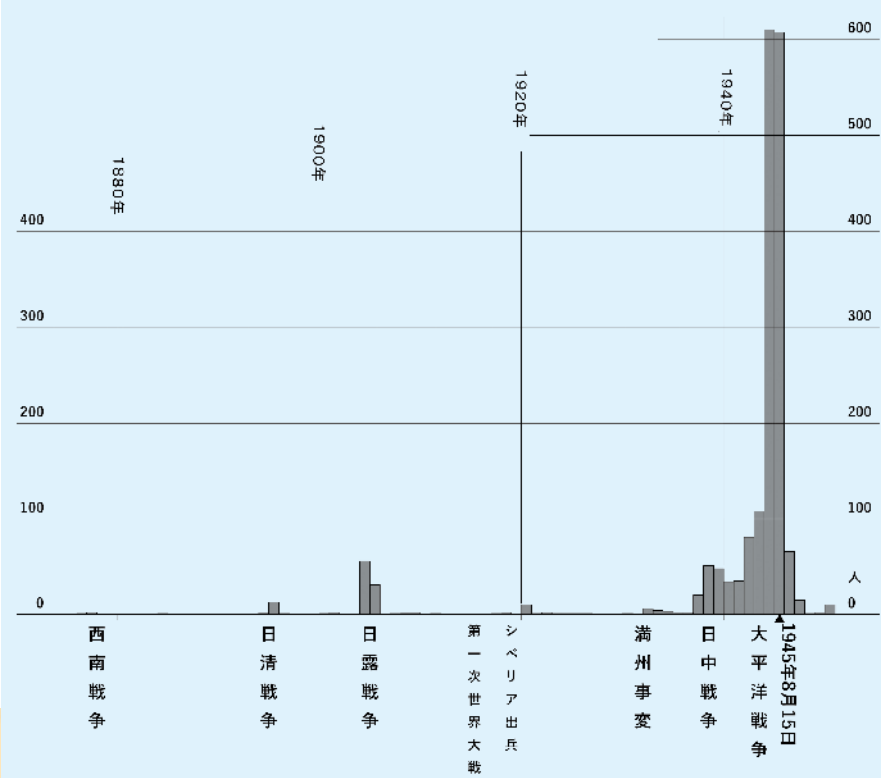

図１　明治時代以降の安曇野市域からの戦死者

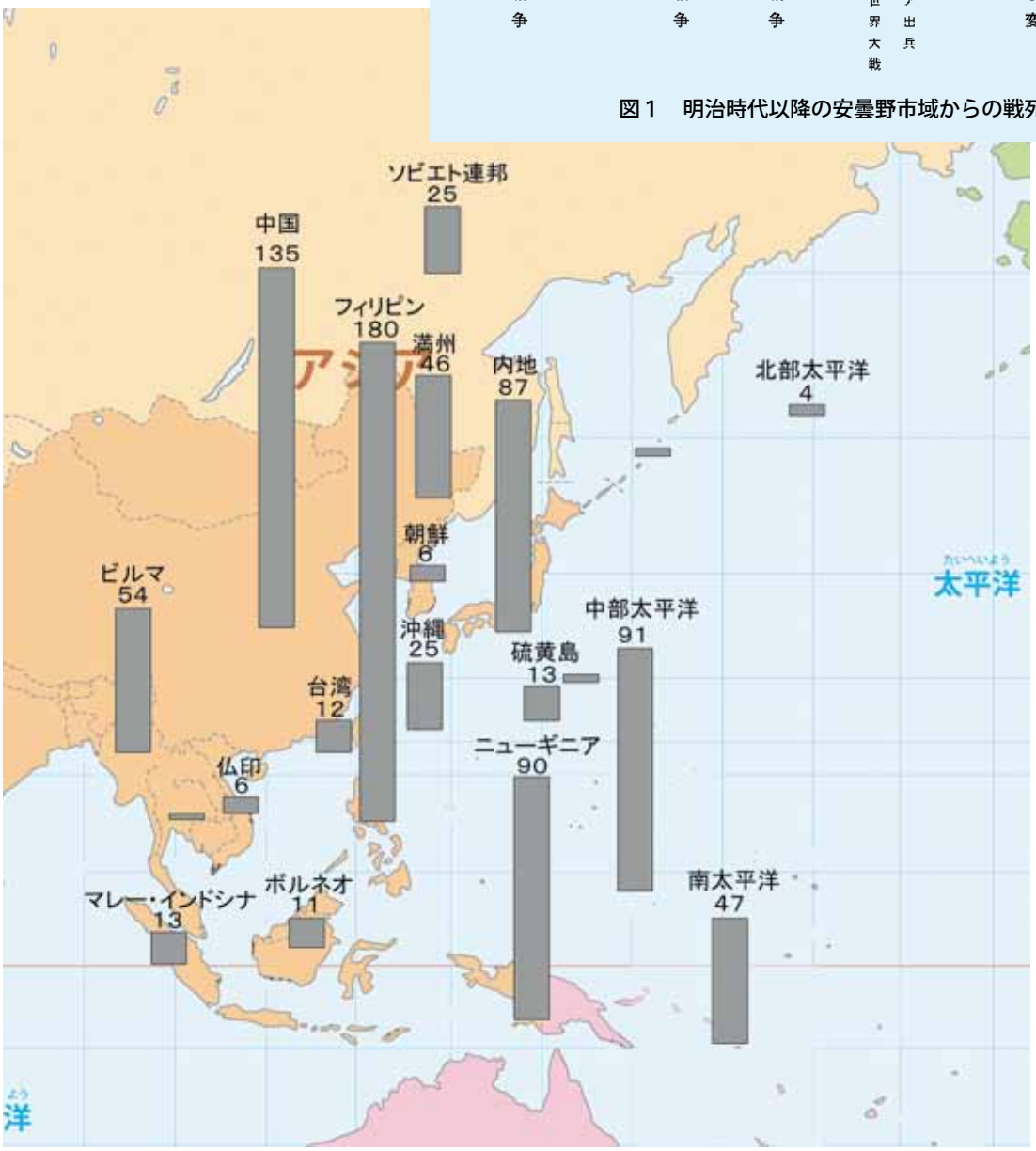

図２　日中戦争以降の明科・三郷・堀金地域からの出征兵士が戦死した地域

ニューギニアの戦いについては、次節でふれる。満州を除く中国大陸は135名である。昭和12年の盧溝橋事件に始まり、８年間の戦闘が広域に広がる泥沼の戦場であった。ビルマ（現ミャンマー）も多い。日本軍は昭和19年３月からインドから中国への連合軍の援助ルートを遮断する作戦、インパール作戦を開始した。当初から連合軍に制空権を奪われ補給が懸念されていたが、日本軍は侵攻を進めた。作戦開始から３ヶ月、反撃が始まると壊滅的な打撃を受け敗走が始まった。兵士たちは飢えと病に倒れ、撤退路は日本兵の遺体で埋まり「白骨街道」と呼ばれ、戦死者は16万人にのぼったといわれる。中部太平洋の島々は、昭和18年以降に米軍の反攻によりタラワ・サイパン島等、「玉砕」が相次いだ。松本で編制されトラック島へ向かった歩兵150連隊は、昭和19年２月に輸送船が空爆を受け沈没、多くの将兵や物資を失いトラック島に上陸、終戦を迎えている。南太平洋は、ガダルカナル島に代表される、陸海軍とも消耗戦であり、大きな損害を受けた。輸送中に船が沈められ犠牲になった者も多い。満州の戦死者も多い。満州を守備する関東軍の主力は、昭和19年後半に連合軍の反撃が本格化すると、フィリピン島、台湾などの南方へ移動が相次いだ。それを補うために、満州開拓団員や満州開拓青少年義勇軍から現地召集された。敗戦間際のソ連参戦により多くの戦死者を出した。さらにソ連での戦死は、敗戦後にシベリアへ連行され過酷な強制労働に従事しその最中に命を落とした兵士たちである。激戦であった、沖縄・硫黄島での戦死者も多い。

戦場となったのは沖縄・硫黄島を除き、ほとんど国外である。その国々の人々に耐えがたい苦痛と、多くの犠牲を強いたことも忘れてはならない。

『戦没者遺影集』には戦死者の生年月日も記載されている。戦死時の年齢は16才から44才までと幅がある。徴兵検査が終わって２年から４年経った22才から24才が多い。17から19才は、海軍へ志願した者などがいる。その中に唯一の女性、動員により工場で病死した17才の女学生？がいる。動員なので戦死扱いである。また生年別に並べると、大正５～11年生は、20名前後となる。特に、大正11年度に生まれた男子の戦死者は25名になり、この年に生まれた男子小学校卒業生の３割以上になる。当然、戦場に向かった者ははるかに多い。

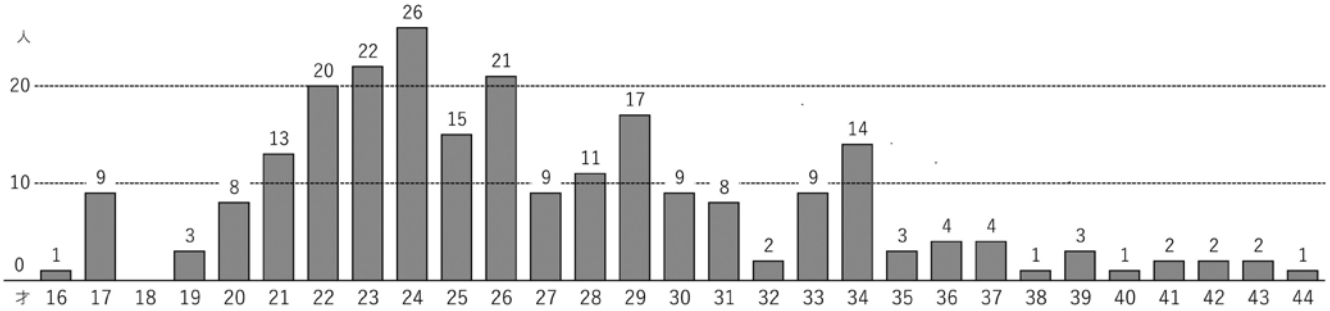

図３　堀金地区の戦死した兵士の年齢（日中戦争以降）

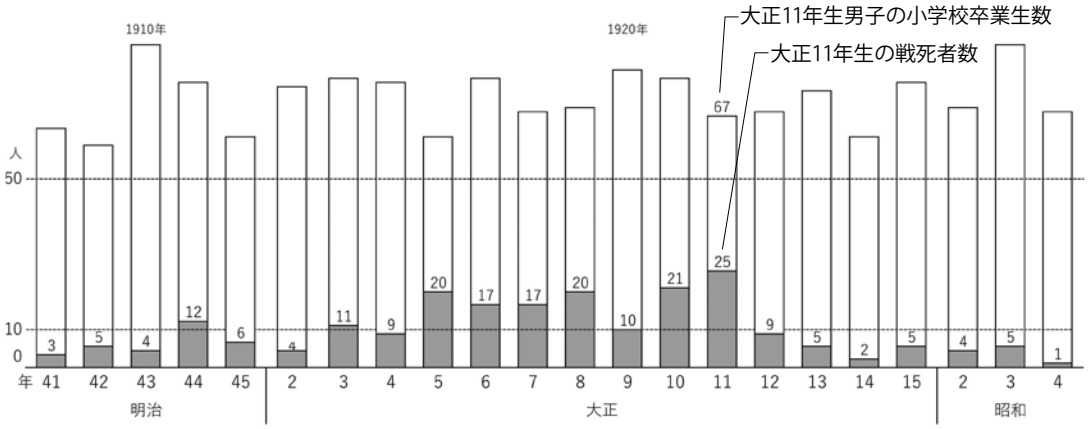

図４　日中戦争以降の堀金地区の出生年度別国民学校男子卒業者数と戦死者数（アミ部分）

ノモンハン事件で戦死した陸軍航空兵

郷土から日中戦争へ

当館は、ノモンハン事件で戦死した豊科出身の陸軍航空兵佐々木武に関係した資料を所蔵している。その中に、所属部隊、兵歴などを記入した軍隊手帳がある。それをもとに佐々木武の生涯をおってみたい。

大正２年（1913）に豊科町に生まれ、昭和２年（1927）３月、豊科町尋常高等小学校を卒業。旧制松本第二中学校（現松本県ヶ丘高校）に入学、昭和７年に卒業する。19才で陸軍航空兵を現役志願、翌年１月20日に現役兵として朝鮮半島治安維持にあたる第20師団（平常）の飛行第６連隊第１中隊に入隊する。基本教育後に整備隊に編入され一等兵、11月21日に上等兵に上がる。12月20日より、翌年４月24日まで、飛行第６連隊の整備士として満州事変に従軍した。４月29日に「昭和六年乃至九年事変従軍記章之証」が授与される。８月３日には操縦学生を命じられ、所沢飛行学校に入隊し基本教育を受ける。２月６日に飛行第６連隊に戻り、本格的に戦闘技術を学ぶ訓練を開始する。１年半ほど経った昭和10年７月７日、「右撓骨下端及右尺骨基状突起骨折兼右撓骨幹不完全骨折兼後頭部右上眼険挫傷」で平壌の陸軍病院に入院する。訓練中の重大な事故か、かなりの重傷である。５ヶ月入院し12月に退院、翌年１月に飛行第６連隊に復帰し訓練を継続する。

昭和12年７月７日盧溝橋事件。８日後、佐々木武は、95式戦闘機を12機装備した新編制の独立第９飛行中隊に加わり、平壌飛行場を出発し、華北全域の戦闘に参加する。途中、部隊編制の変更により名称が飛行第64戦隊第３中隊に変わるが、華北での戦闘が続く。12月１日の済南攻撃の戦闘中に、階級が航空兵曹長に上がる。24才である。翌年１月５日に南京飛行場で最新鋭機97式戦闘機の引き渡しを受け、２年間に渡り中国大陸での航空戦を続ける。かれの活躍は新聞記事に取り上げられる。

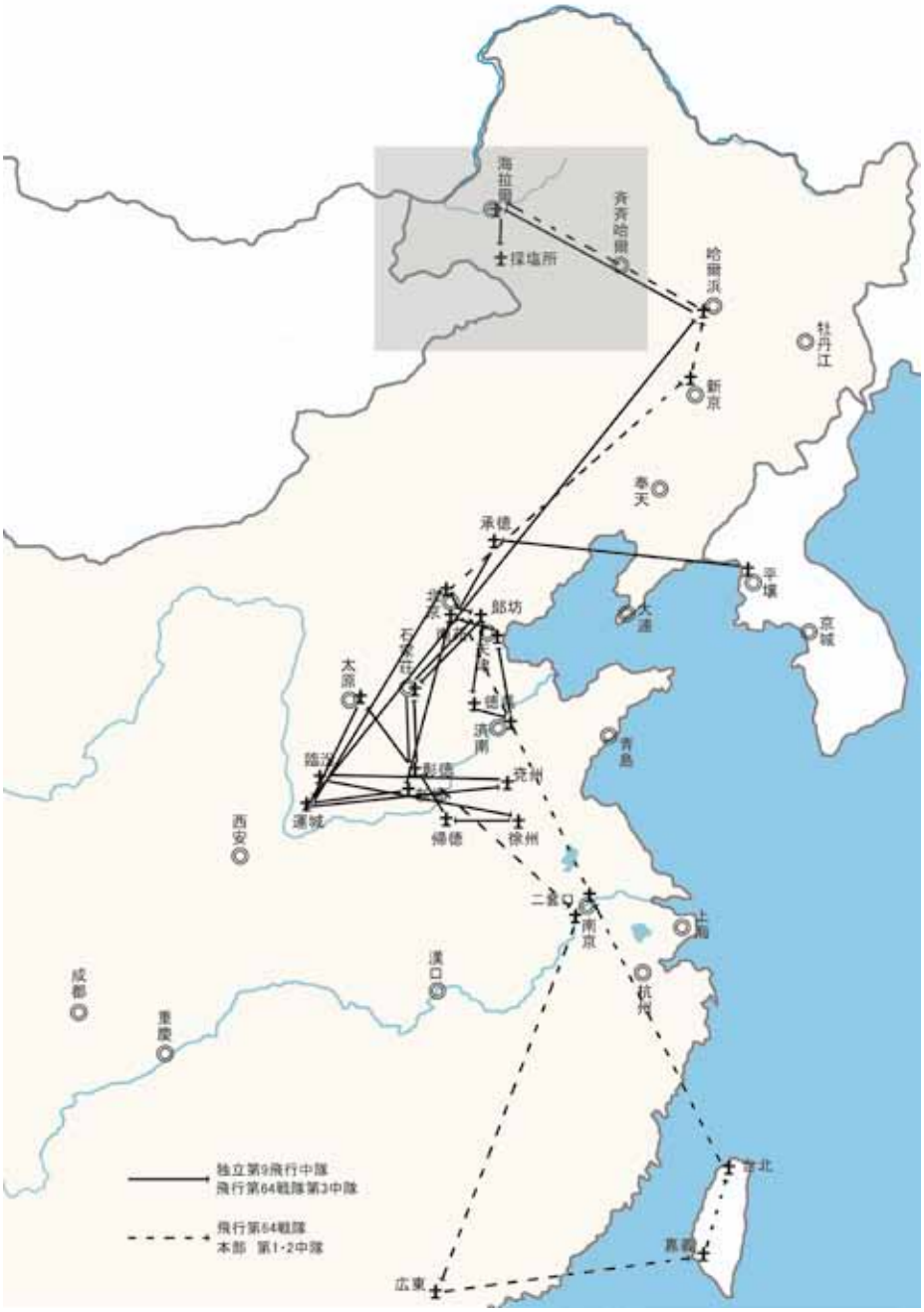

図５　佐々木武の中国大陸での転戦（アミ部分　次ページに拡大）

ノモンハン事件へ

満州国は建国以来、国境線をめぐってモンゴル（外蒙古）との間で、小競り合いを繰り返す。昭和14年（1939）、モンゴルを支援するソ連と日本軍との間で、大規模な武力衝突に発展した。当初、日本軍は地上戦で押されたが航空戦で圧倒した。８月中頃、欧州戦線から兵力の増強を重ねたソ連軍は大攻勢を仕掛けてきた。日本軍は敗退を重ね、ソ連軍は自らの主張する国境線まで進出し侵攻を停止する。最初優勢であった航空戦も、ソ連軍が欧州戦線から熟練操縦士の補強、空中戦を一騎打ちから集団戦へ、機材の防御力を増大、さらに日本の倍以上の軍用機を投入した結果、日本軍は同程度の損害にも関わらず消耗が大きく劣勢となった。大本営は９月６日に作戦中止命令、９月16日にソ連とノモンハン停戦協定を締結。ソ連はアジアでの戦争を早期解決し、ヨーロッパ戦線に兵力を集中する意図があったといわれる。

ノモンハン事件の日本とソ連の両軍あわせた戦傷者は30,000名にも及んだ。日本軍は、多数の火砲に援護された戦車・装甲車で構成されたソ連機械化部隊との戦闘は、第一次大戦で陸上戦の経験がなくはじめてであり、戦死傷者も18,000名に及んだ。しかし当時の国内の新聞は、華々しい戦果を強調する軍の発表が飾り、楽勝ムードの紙面があふれていた。

昭和14年８月１日に佐々木武が属する飛行第64戦隊は「第二次ノモンハン事件応急派兵部隊」に編入が決まり、北京からハイラルに向かいホシム・採塩所飛行場を拠点として戦闘に加わる。８月18日は上空に現れた40機ほどのソ連機に対応して出動。８月19日は、軽爆撃機隊の援護、及びソ連機の迎撃向かう。部隊は帰還時にソ連機の攻撃を受け、大きな損害を受ける。８月20日もソ連機が頻繁に飛来。迎撃にあたるが、多くの戦闘機が破壊され、戦力は大きく低下する。

写真３　佐々木武の活躍を伝える新聞記事
（以下　写真９までは当館蔵の佐々木武関係のアルバムより）

写真４　佐々木武の搭乗機（当館蔵）

図６　ノモンハン付近　佐々木武戦死地

８月21日、朝５時45分、ソ連軍は砲撃を開始、８時15分、多数の爆撃機と戦闘機の攻撃とともに戦車を先頭に全地上部隊が前進を始めた。第64飛行戦隊は、防空や地上戦の援護のほか、ソ連軍の航空拠点であるタムスクなどの飛行場群へ攻撃を仕掛けた。敵を排除して一時的に制空をしても、ソ連軍の多数の爆撃機と護衛する戦闘機が交代して登場するため、戦場上空は常にソ連機が覆う状況になった。第64戦隊は、４回の攻撃を実施する。「本日実施セル戦闘ハ本事件開始以来最大の激戦ニシテ我ガ損害モ比較的大ナリ」と表現された過酷な航空戦であった。17日に25機あった可動機も17機に減った。この日の延べ出撃機数は82機、延飛行時間は136時間にも及び、一機あたりの飛行回数は５回、飛行時間は８時間となった。操縦士の疲労はピークに達したのであろう。第２次と第４次で３機を失い、操縦士３名の行方不明者を出した。その一人が「佐々木曹長」であった。佐々木武は、８月21日のソ連軍タムスク基地への第４次攻撃の援護のため午後７時以降に出撃し、その帰途の空中戦で撃墜されモンゴル領内に墜落して戦死した。26才であった。

家族への通知、慰霊と顕彰

父に宛て、８月30日、ハイラルの部隊から佐々木武が空中戦で行方不明。９月７日に８月21日に外蒙古タムスク北方30*km*の空中戦で戦死という連絡がはいる。10月16日、飛行第５戦隊長から「戦時死亡者ノ件通牒」が届く。この通牒には次のような別紙が付く。町長に対する死亡報告は官（陸軍か）から行うとする文書。飛行第６戦隊長代理による死亡認定書の写し。第２飛行集団長が飛行第５戦隊長に戦死者の手続きを依頼した通牒の写し。戦死した８月21日付で陸軍航空兵准尉に任官された通知。

このような公式通知のほか、直属の上司である飛行第64戦隊第３中隊の中隊長鈴木五郎大尉から父にあてて、戦死の状況を知らせる９月７日、９月９日付けの私信が２通届く。「二伸」として、かれの遺骸は敵地深くあるため回収できないが、遺品は送るとある。寄贈された軍隊手帳はそれであろう。

所属した飛行第64戦隊は、10月８日に満州国牡丹江省東京城で、８月21・25日に戦死した９名の航空兵とともに佐々木武の葬儀を実施した。12日、満州国首都新京で満州国主催の慰霊祭。14日に遺骨は船に乗

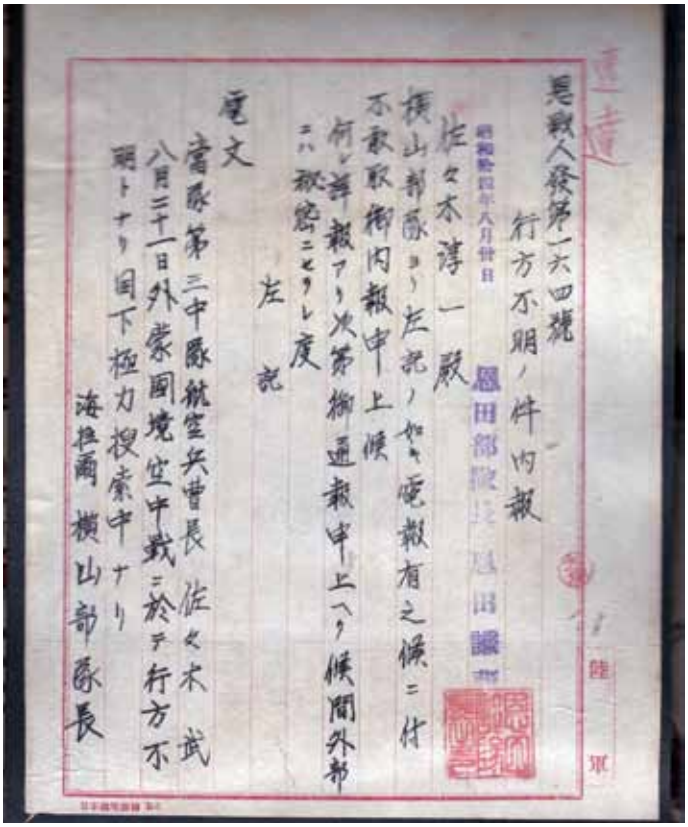

写真５　「行方不明ノ件内報」

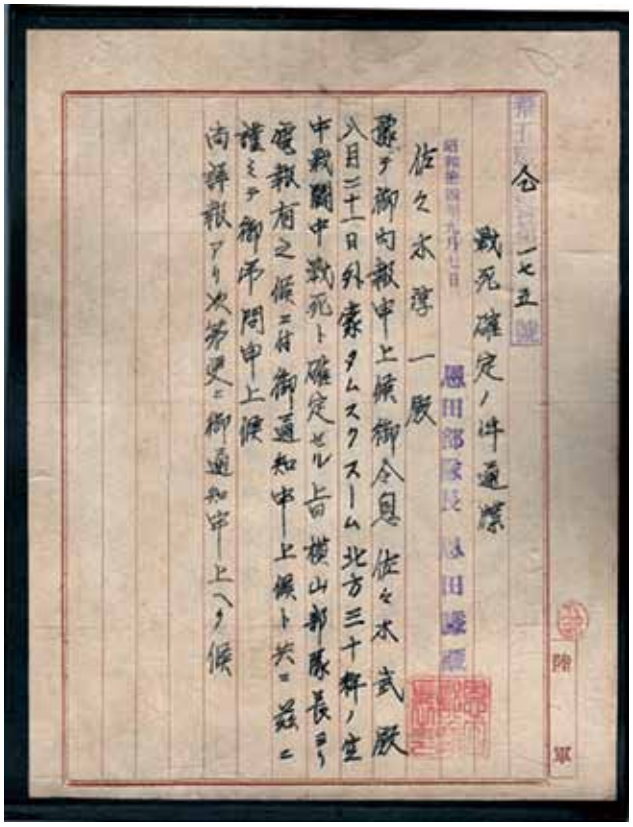

写真６　「戦死確定ノ件通帳」

せられて大連港を出港。その際、多数の一般市民が参加しての大連市主催の慰霊祭。10月19日に、戦友の胸に抱かれた遺骨が割烹着を着た婦人たちの出迎えを受け神戸に上陸。大日本国防婦人会神戸本部主催の慰霊祭が行われた。

11月２日に豊科小学校校庭で、町出身者「入山少尉　佐々木准尉　犬飼上等兵　冨或上等兵　曽山上等兵　丸山上等兵」の町葬が行われる。手厚く、葬儀、慰霊祭が重ねられた。

昭和15年９月26日、「支那事変」の戦死者12,602名の第21回論功行賞が発表される。その中で抜群の活躍に与えられる殊勲甲はわずか117名、佐々木武も「功五旭七」、功５級旭七のほか、「世界空軍史に燦然輝くノモンハン空の勇士36名」の一人として殊勲甲を受賞している。郷土の誇りとして地方紙の紙面を飾り、英雄扱いであった。勲章とともに、功五級金鵄勲章証書が贈られてきた。

靖国神社は、戦後になって豊科町役場を通して昭和28年（1953）７月の日付で、母に連絡をする。陸軍航空兵准尉佐々木武は、昭和21年11月19日に招魂、翌年４月21日に合祀した。「みたま」のお慰めのご奉仕をいたしているので安心してほしい、占領という特殊な状況のため合祀の祭典にも参加いただけなく、通知もできなかったという内容である。

佐々木武は、19才で陸軍を志願して、朝鮮半島に渡り戦闘機の操縦士となる。中国大陸の戦線に参戦し、満蒙国境に移動してノモンハン事件で、26才で生涯を閉じる。かれがどのような気持ちで軍隊生活を送ったのかはわからない。ただ、「陸の荒鷲」と呼ばれた、戦闘機の優秀なパイロットであった。満州事変、日中戦争、ノモンハン事件と、歴史の波に飲みこまれ、命を落とす。

※陸軍航空兵の佐々木武については、詳しくは次を参照いただきたい。
原明芳　2020　「ノモンハン航空戦で戦死した旧豊科町出身佐々木武准尉」
『安曇野市豊科郷土博物館』紀要　第７号

写真７　満州国新京　慰霊祭

写真８　豊科小学校での町葬

一際輝く殊勲甲

早速霊前へ報告
威波の佐々木准尉遺族

写真９　殊勲甲を伝える新聞記事

帰ってきた二つの日章旗

２枚の寄せ書きがされた日章旗がOBON SOCIETY（14ページ参照）の活動と、日本遺族会、長野県遺族会、安曇野市遺族会の協力のもと、戦場からその持ち主の郷里、安曇野市に戻ってきた。

「祈武運長久　為本田卓郎君」
‥‥激戦地ニューギニアから還った日章旗

明盛村（現安曇野市三郷明盛）出身の本田卓郎は、この日章旗を携えて戦場へ向かった。『三郷村誌１』に、昭和18年９月16日にニューギニアで戦死したとある。記載の階級は兵長、死亡時の階級は上等兵であろう。この日章旗はアメリカ軍兵士がニューギニアの戦場からアメリカへ持ち帰ったもので、激戦を物語るように傷みが激しい。寄せ書きの筆頭は明盛村村長の「祈武運長久　為本田卓郎君」、「大和魂」「義勇奉公」「義烈」など明盛村の人々の寄せ書きが入る。

太平洋戦争が始まると、日本軍は連合国側に参戦したオーストラリアとアメリカの間を遮断するため、当時オーストラリア領であった東部ニューギニア、さらに東のソロモン諸島の攻略を計画した。昭和17年７月、日本軍はガダルカナル島（ソロモン群島）、ニューギニアに侵攻を開始した。一度占領したガダルカナル島は、８月にアメリカ軍が上陸し反抗を開始し激しい戦闘となった。補給が途絶した日本軍は、多

写真10　ニューギニアから還った日章旗（当館蔵）

くの戦死者、餓死者を出して翌年２月に撤退する。ガタルカナル島は、「餓島（がとう）」とも呼ばれた。

また日本軍は、東ニューギニアのオーストラリア軍の拠点、ポートモレスビー攻略のため、標高2～3,000mの山岳地帯やジャングルを越えることとなった。行軍さえままならず、補給も不足することになる。翌年９月に優勢なアメリカ・オーストリア軍の本格的な反抗が始まると、日本軍は敗戦を重ね、次第に制海権・制空権を失い、補給も途絶した。将兵は飢餓や過酷な自然環境との戦いを、昭和20年８月15日の敗戦まで続けた。ニューギニアに上陸した日本軍総勢14万名のうち、わずか１万２千名が生き残ったものの、敗戦以後も死亡者が続き、日本に帰還できたのは約１万名といわれる。

本田卓郎が戦死した昭和18年９月は、アメリカ・オーストラリア軍の本格的な反撃が始まったころである。具体的な戦死の状況はわかっていない。

「祈武運長久　贈青柳万亀寿」
・・・フィリピンから還った日章旗

昭和16年12月の太平洋戦争開戦直後、日本軍はアメリカ統治下のフィリピンへ進攻した。翌年１月にマニラを占領し、６月にほぼ全土を掌握した。日本の統治となるがフィリピン人の抵抗は続いた。

昭和19年10月、中部太平洋から反抗を続けるアメリカ軍は、レイテ島に上陸した。日本海軍はレイテ沖海戦で事実上壊滅し、日本からの海上補給はより難しくなった。翌年にアメリカ軍はルソン島に上陸し、やがてフィリピン全土が戦場となった。６月までの戦闘で日本軍の主力部隊は壊滅し、その後はジャングルの中を逃走しながら散発的な戦闘を続けることになった。補給も途絶え、飢えとの戦いも強いられ餓死者も多く、戦傷の悪化やマラリアなどの伝染病による死者も多かった。この状況は、1945年８月15日をすぎても続いた。フィリピン戦での旧日本軍の死者は約51万8,000名といわれる。

写真11　フィリピンから還った日章旗（個人蔵）

写真12　マニラ麻畑（個人蔵）

写真13　太田興業事務所（個人蔵）

写真14　マニラ麻工場内部（個人蔵）

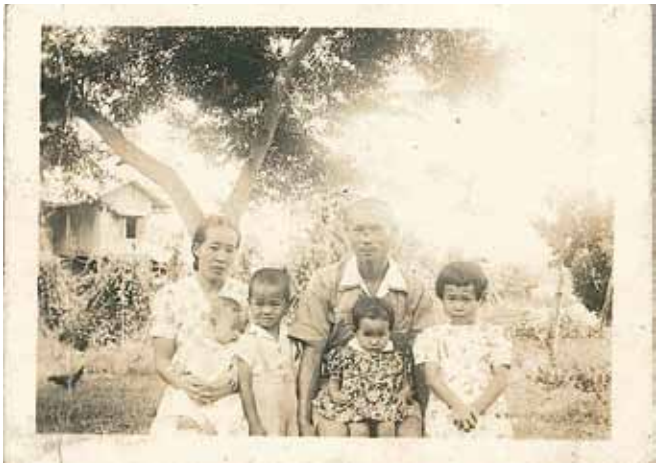

写真15　青柳万亀寿とその家族（個人蔵）

フィリピン人の犠牲も大きかった。昭和20年２～３月のマニラ市街戦では約10万人の市民が巻き込まれて命をおとした。フィリピン全土の犠牲者は約110万人、当時の人口の７％にも及んだといわれる。

日章旗に名前が入った青柳万亀寿（まきとし）は、明治45年３月18日に三田村（堀金三田）で生まれた。昭和４年の大恐慌の最中に南安曇農学校（現南安曇農業高校）を卒業後、就職が決まったのが太田興業、当時アメリカ領であったフィリピンのミンダナオ島ダバオ周辺で手広くマニラ麻の生産と加工をしていた。一帯は、マニラ麻の世界的な生産地で、２万人ほどの日本人が働いていた。万亀寿は、順調に仕事を続け、昭和13年には工場の総支配人となった。良縁にも恵まれ、大正５年生まれの晴美と結婚し、４人の子どもを授かり、公私ともに順風満帆の生活を送っていた。昭和16年12月８日、太平洋戦争が始まる。日本人は収容所に入れられ、生活は一変した。翌年１月、日本軍がフィリピンに進攻し、マニラを占領、ダバオにも上陸し日本人は解放されることになった。その後、ダバオは南方作戦の重要な場所となり軍用飛行場が建設された。アメリカ軍の反攻がはじまった。前年にレイテ島に上陸したアメリカ軍は、昭和20年３月10日にミンダナオ島へ上陸。４月になるとダバオに近づいてきた。在留日本人は、軍の命令によって、奥行きが45*km*もある、丘や川、洞窟のある密林に逃避することとなった。すでに万亀寿は現地召集されて軍隊に入っていた。還ってきた日章旗は入隊の際に贈られたものと思われる。ここからは、万亀寿さんの長男の長一さん（昭和15年５月６日生）に記していただいた回想録から見ていきたい。

母晴美（29才）は、夫が軍隊に入ったため、長女洋美（７才）と長一（５才）、妹寿美子（３才半）、

弟信吾（１才半）を連れて20人程度のまとまりで密林に逃げ込んだ。攻撃を受けるたびに奥に入っていった。洞窟を見つけ隠れたが、みず知らずの人たちの中、食料もなく皆疲れ果て、無言であった。この中で、弟の信吾は命を落とした。この年齢ではジャングルの逃避行は無理であった。米軍の攻撃が続く。水も不便で食糧がなくなるとさらに奥地へ移動していった。そのうち集団がくずれ、親子４人の逃避行となった。すでに日本軍は軍隊の体裁をなしておらず、道端には数え切れないほどの兵士の死体がゴロゴロと転がっていた。食糧を探しながらの逃避行であったが、攻撃を受けるため、１ヶ所に長く留まれない。途中、作業小屋で軍人と一緒になり米をもらったが、３日後の朝、その軍人も冷たくなっていた。軍人は、母に３人の子連れではどうにもならないので、白い旗を持って山を下りろと諭していた。母はどうすればよいか困惑したようである。この小屋を出たところで、原住民とも遭遇した。米軍の攻撃が続く。10人ぐらいの集団（軍人たちか）に着弾して、一人の足が吹き飛び鮮血が流れ出した。急きょ谷底に逃げ込み、難を逃れた。さらに奥地へ逃げ込むと、川沿いに赤十字のマークが入ったテントを見つけた。日本軍の野戦病院である。ただ無人で、医療器具もなかった。ケガをした多くの軍人がたどり着いていたが、絶望して手榴弾で自殺をした。その爆発音が毎日のように響いた。父万亀寿とは逃避行中に出会う。姉と２人で薪を拾いに出た道端で、全く偶然であった。

昭和20年８月15日、密林の中にいて敗戦を知らなかった。翌日、妹の寿美子は栄養失調で亡くなった。アメリカ軍は早く降伏するようビラをまくが、デマだと誰も信用しなかった。ただ、爆撃と砲撃は止んだ。１ヶ月ぐらいたつと、アメリカ軍のジープに乗った日本人が、スピーカーから日本の敗戦を知らせるようになった。それをきっかけに多くの人がジャングルから出てきた。トラックに乗せられ収容所に向かったが、途中、住民より投石があったと母から後で聞いた。そこで、持ち物検査があり、武器、ハサミやナイフ、日章旗などが没収された。今回返還されたのはこの日章旗である。収容所は何百ものテントが張られ、土のうで仕切られ４家族が入れられた。食事は主に缶詰。父は収容所の給食場で働いていた。２ケ月程度の収容であった、この間、毎日のように病気、衰弱のため死者が出た。

10月中頃、引揚げが始まった。婦女子が優先。父を残して第一船（米軍の貨物船）に乗ることとなった。

図６　フィリピン　ダバオ付近

写真16　収容所跡（個人蔵）
左より　アポ山（2,965m）、マッキンレー山、タロモ山

沖の輸送船まで水陸両用車（上陸用舟艇）で向かう。そのうちの一隻が沈没。ここまで来て犠牲者が出てとても残念だった。ダバオから出港、10日かかって広島県の宇品に上陸した。収容所に４～５日滞在して父の実家である三田村へ向かった。途中、大阪駅で電車とホームの間に片方のぞうりを落としてしまい、そこからは裸足で歩くことになった。母は不憫なことをしたと何年経っても私に語った。豊科駅へ到着。家族３人、10月おわり頃だというのに半袖半ズボンの姿は、周囲からは奇異にみられたようであった。父はほぼ１ヶ月遅れで戻ることができた。

令和３年３月に日章旗が還ってきた。すでに青柳万亀寿は平成元年に、妻晴美も昭和51年に亡くなっていた。

※青柳長一さん（堀金）には、貴重なお話とともに「随想録」と資料を提供いただいた。

OBON SOCIETYは、先の大戦で連合軍兵が持ち帰った旧日本兵の「寄せ書き日の丸」をはじめとした遺留品を遺族へ返還することを目的として、アメリカ合衆国オレゴン州に本拠地を置く、２００９年から活動をしている非営利・非政治・非宗教の人道的活動組織である。終戦から７０年目となる「２０１５年のお盆」を目標に、できるだけ多くの日章旗を返還できるようにという願いを込めて「OBON2015」と名付けられたが、2016年からは『OBONSOCIETY』と改名し、活動を継続することとなった。

戦争を地域で記憶する

兵士の死は、自ら望んだものではない。家族にとっても受け入れがたい死であった。しかし、国家にとっては必要な死であった。戦死者をどのように葬り祀るかは、国家の大きな課題であった。兵士を送り出した地域も、大切な仲間を失い、何らかの形で追悼、顕彰しようとした。

戦死した兵士は、現地で火葬、仮の慰霊祭が行われ、遺骨が白木の箱に入って帰国する。所属する部隊で盛大な慰霊祭が行われ、白木の箱は遺族に抱かれて帰郷する。郷里では、到着時間が知らされ、多くの人たちが出迎える。町村葬は、国民学校の講堂や校庭などに児童を始め戦死者を見知らぬ人も参列して営まれた。葬儀の主催者は町村長、遺族は主賓であった。葬儀は、戦死が国にとって有意義なものであったことを伝える目的もあった。

写真17　御遺骨帰還通知（当館蔵）

謹啓
今次事變ニ於ケル名譽ノ戰病死者
故陸軍伍長等々力正人氏ノ村葬佛式ニ
依リ來ル十月六日午後一時本村堀金國
民學校ニ於テ執行可致候間御會葬賜リ
度此段御通知申上候　敬具
昭和十六年九月二十七日
長野縣南安曇郡烏川村
部隊委員長
烏川村長　平倉壽一

写真18　村葬通知（当館蔵）

日本軍はできる限り遺骨を国内に返したが、太平洋戦争が始まり、ガダルカナル島戦以降、遺体収容が困難になり、さらに玉砕などで遺体を戦場にそのままにする状況となった。戦場の砂などが納められた遺骨箱を届ける「魂の帰還」が始まる。遺族は、丁重な葬式も行われず、遺骨・遺品もないまま戦死公報だけを受け取ることになった。戦後になると、戦没者の遺骨の出迎・葬儀等は、学校としての参加、一般の人に対しての参加の強制も禁止された。

兵士を送り出した郷里は、先の大

写真20　堀金小学校校庭での村葬（当館蔵）

戦まで、戦争があったこと、戦死者を忘れないと誓いを込めた石碑を、多くの人々が目にする道ばたや神社の境内に建てた。中には、忠魂碑のように、国のために戦って死んだ兵士たちの「忠義」の魂をほめたたえ、人々に対して、戦争を続けるために命さえも国に捧げる教育を進める役割を果たした石碑もあった。昭和20年の敗戦後、日本を占領・管理した連合軍最高司令部（GHQ）は、軍国主義や極端な国家主義を宣伝する施設として忠魂碑の撤去を命じ、実際に、倒され埋められた。昭和26年にサンフランシスコ講和条約が結ばれると、忠魂碑は掘り起こされ再建された。その際に、場所も移動し戦死者名を刻み直されることもあった。また新たに戦死者名を刻んだ慰霊碑も建てられた。戦争を刻んだ石碑は、戦争を直接感じとることのできる地域の歴史的遺産である。身近にある戦争を記憶する石碑から、戦争を知り、平和を考えてみてはどうだろう。ここでは二つの石碑を紹介したい。

旧東川手村の忠魂碑

明科の明北小学校の東、石段を登っていくと一段高いところに、石の角柱の垣根に囲まれた忠魂碑が建っている。正面に「忠魂碑」、「元帥公爵山県有朋」、側面に「明治四十一年七月」「東川手村」と刻まれている。明治41年（1908）、日露戦争が終わって３年後、戦死者を顕彰するために、東川手村が建立した忠魂碑である。揮毫は、明治～大正時代に軍人・政治家とし絶大な発言力を発揮した元勲山県有朋である。 裏面は、先頭に西南戦争、最後は太平洋戦争までの戦死者、106名の氏名が刻まれている。明治41年の建立では、太平洋戦争までの戦死者名は刻めない。正面台石には、破損しており何に使われたかわからないが、陸軍の「☆」マークが入る銅製の扉がついた小さな部屋が設けられている。その横に「昭和二十九年五月再建」と小さく刻まれている。

この忠魂碑は、連合軍最高司令部（GHQ）の命令により、倒されたか埋められ撤去された。昭和26年

写真21　忠魂碑（明北小学校東）

写真22　殉公碑（堀金支所前）

のサンフランシスコ講和条約を契機に、各地で忠魂碑は掘り起こされたりして再建されると、翌年に合併を控えた東川手村は、裏面を削り直し明治以来の村出身者のすべての戦死者名を刻んで場所を移して再建したようである。

堀金支所前の殉公碑

堀金地区には、賀茂神社境内に「明治廿七八卅七八戦役紀年碑」(明治44年）、支所の西側に烏川村の出征兵士や留守家族の支援を目的とした恤兵（じっぺい）会が建てた「明治三十七八年戦役紀年碑」、小田多井の集落の西側には三田村分会（在郷軍人会）が建てた「忠魂碑」(大正10年）がある。いずれも、合併前の戦死者の慰霊や従軍者の顕彰を行ったものである。

堀金支所前に「殉公碑」と刻まれた碑が建っている。「殉」は、自分の生命を投げ出すこと、公に自分の命を投げ出した人を忘れないための碑という意味か。碑文の下に銅板のプレート。「大正一一．八．二六」、そして名前が刻まれている。前年（大正10年）まで日本はシベリア出兵をしており、それに関連した戦病死者名か。続いて「昭九．六．二五」と日中戦争の、最後には太平洋戦争の合計240名の戦死者名が刻まれている。裏面には「昭和卅三年戊戌十一月吉日建立」とある。少し離れて、銅製のプレートが表裏にはめ込まれた大きな長方形の石碑がある。表には旧堀金村の戦争からの「帰還者」が地区ごとにイロハ順に、続いて裏にかけて「平和記念殉公碑一般寄附者芳名」、そして「平和記念殉公碑遺族寄附者芳名」が刻まれている。この碑が、戦死者の追悼とともに、平和への想いを込めて、新たに発足した堀金村の人々の寄附によって昭和33年に建てられた石碑であることがわかる。

今回の企画が、戦争で失われた命を忘れず、平和を守るという気持ちを強く持ち、未来へ平和の大切さを伝えていく、その一助になればと願います。　（原　明芳）

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あした　No.26」
編　集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　令和４年７月23日
安曇野市豊科郷土博物館　〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8
TEL：0263－72－5672 / FAX：0263－72－7772
URL：https://www.city.azumino.nagano.jp/site/museum/